

美術手帖 1999 4 月号

宮崎準之助展 福岡県立美術館一 9 年 2 月 12 日 1 月 16 日

1930 年福岡市に生まれ、89 年に他界した彫刻家、宮崎準之助の一回顧展が福岡県立美術館で開催された。木を素材に、卵型、波形、箱の反復する形態がさまざまな表情を見せながら、床、柱、壁を自在に覆う。床に散在する木の卵や増殖する箱、洗濯板のような波板シリーズなど、いずれも洗練されたフォルムをもち、そして大型の可動性の遊具はおおらかな意外性に満ちていて、制作当時の水準から見て先駆的なものもある。いずれも現代彫刻の類型にはまらない独自性を固持した作品群である。

この展覧会の作品のほとんど全部が樺(くすのき)でつくられていて、そこには素材に対する作家の執着が見える。木目が美しく、独特の芳香(樟腦の匂い)をはなち、虫がつきにくく、丈夫で加工しやすい。九州ではありふれた木である。神社の境内などにはかならず大木が二、三本あるし、街路樹でもよく見かける。神社仏閣の柱や木角魚、仏像になったりもして、そのことが作品を一種の供物のようにも見せる。樟の用途は広く、建築・家具に多用されているから彫刻用としては手に入りにくい素材である。作家の手記には家具の名産地である大川まで探しに行ったと書かれている。

木球をまるで日干しの野菜のようにムシロに並べた「われは田夫」(1979—82)は、自らを表現者の特権的立場におくことを許さず、大地の恵みを収穫する農夫になぞらえる宮崎の所信表明と受け取ることができる。黙々とノミをふるい荒削りして、あとはいねいに磨きあげていく。卵の形をしたもののなかに、なにかの記号が呪文のように表面に刻まれているものがいくつかある。意味は不明だが作家のつぶやきのようにもとれる。また荷車やシーソー、起重機のような動く形態は分解・組立てが簡単そうで遊具としてもおもしろいものになっていて、いずれの形態にもさまざまな想念が見え隠れする。

宮崎の経歴のなかで大きな位置を占めているのが、18 年の福岡県立小倉聾学校の教員生活と 前衛美術グループ「九州派」での活動だろう。酒が入った激烈な議論や喧嘩などが多く語られる集団のなかであって宮崎の寡黙で淡々とした制作態度は異色だが、彼は1958年頃に参加し、以後だいたいメンバーの中核となっていく。また同時に聾学校の子もたちとの生活が彼の日常であった。

宮崎の仕事は作意衝動というより、理が勝った文人的作風である。木球のひとつひとつを彫り磨いていくようなスタティックな仕事は、無意味かもしれない行為をひたすら持続するという「九州派的(?)な側面でもあるが、現代美術の課題をクリアし作品化していく優等生的側面であるようにも思える(たとえば彼がブランクーンを意識していたように)。そして教育者と表現者の境界を往復すること、これらが多面的に重なり合っているのが宮崎作品の特色といえるかもしれない。今回の総覧的な展示を一見していると、展示全体がひとつのインスタレーションであるかのような迫力を感じた。